
ハル キョン

涼宮ハルヒ & 柊こなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハル キョン

【Nコード】

N0576P

【作者名】

涼宮ハルヒ&柊こなた

【あらすじ】

それは、突然だった。ある日俺が眠りから目覚めると男の子には絶対にあるものがなくなっていた、そう俺は、女になっていたのだ！「涼宮ハルヒの憂鬱」のガールズラブな話になっています。この「ハル キョン」は、にしすけさんが製作した「かが こな」を元に製作しました。作者のにしすけさんには、許諾を頂いておりません。

思い

俺はこの世に生れて、初めて恋という感情を抱いた。高校に入るまで、ただのんびりと過ごしてきた俺が高校に入学して初めて会ったあいつにいつしか恋を抱いていた。

あいつと初めて会った時、まだお互いのこともよく知らないのに突然、「部活を作るからあんた、手伝いさない！」とか「ホームペーじを作って！」など、いろいろとあいつに振り回されてきたのだが、でもそんな傍若無人ところや猪突猛進に突っ込んでくるところや素直に言えばいいのに素直に言えないことなど、だんだんと時間が経っていくうちにあいつの魅力に気付いていった。そしてある日、俺は突然気付いた。俺、あいつのことを好きになつていてという事に気付いた。いつも俺は自分の頭の中で、あいつの顔を浮かべていた。授業を受けているときや古泉とオセロをやっている時など何をしていたてもあいつのことを毎日、思ってしまう。そして、いつかあいつに俺の思いを伝えたいという思いが芽生えたのだが、その思いは伝えられない、なぜならあいつは宇宙人・未来人・超能力者以外の人は、興味はないと入学式の日に堂々と宣言していた。でも、俺は古泉曰く「普通の人間」らしい、果たしてあいつは、こんな普通で凡人の俺を受け入れてくれるか不安に思っていた。でも、まさか俺があんな目にあうなんて全く思っていなかった。

それは、何も前触れもなく突然のことだった。いつもの時間に、目覚まし時計が鳴りそして妹が起こしに来る、いつもの日常が来たと思っていたのが、妹のある一言で俺は一気に目を覚ました。

「おはよう、キョンちゃん」

何かがおかしかった。

「おい、今なんて言った？」

妹が何て言った、もう一度聞く。

「え？ さっきのこと？」

「そつだ、もう一度言ってくれ」

「『おはよう、キヨンちゃん』って言っただよ」

どうやら俺の耳は、おかしくなっている。「キヨン」の後に「ちゃん」がついているように聞こえる。

「おい！ いい加減、実の兄のことをあだ名で呼ぶのはやめなさいと言っているだろっ」

「兄？」

妹が、不思議そうな顔をして俺を見つめそして俺の脳を破壊しかなない衝撃的なことを言った。

「キヨンちゃん、女でしょう」

「え？ 女」

一体、どういうことなんだ。俺が女って……。その疑問を解くため俺は、クローゼットの鏡で自分の姿を見た。そこには、髪の毛腰の辺りまで伸び、身体が少しだけ小さくなり、顔もちよつとだけ小さくなっていた。でも、俺は最も重要なところを調べなければいけなかった。

「ちよつと出て行ってくれるか？」

そう言っただけ俺は、妹を部屋から追い出した。妹を追いだした後、息を呑みながら一番重要な部分を確認めた。

「……………う、嘘だろう」

俺は気絶しそつだった、股のそこには本来なら男の子には絶対必要なものがきれいさっぱり無くなっている。

「なんで、どうして……………」

もう俺は、言葉を失った。今、自分の股のところに普段あるものが突然消えているのだ。私が、口をポカンと開けて立っていると「キヨンちゃん、もうお母さんが制服に着替えてごはん食べなさいっ」

と妹が大きな声で言ってきた。

「すぐ行く」

そう言っただけ俺は、髪の毛をポニーテールにまとめた。やっぱり、

髪型はポニーテールだろう。そう思いながら制服を出す。

「制服も変わってやがる」

制服もブレザーではなく、セーラー服になっていた。慣れていない制服をなんとか着た後、一階に降りて妹と一緒に朝食を食べて学校に行った。

思い（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。今回、三作品目のガールズラブの作品になっています。駄作ですけど、よろしく願います。

次回投稿は、来週の金曜日になります。

朝

朝、俺の体に起きたハルヒの願望による現象を考えながら、ポニ―テールの髪を揺らし学校に向った。途中、谷口と会ったのだが谷口は、俺が以前から女だったという認識をしていた。どうやら、完全に俺は女だったという事になっているらしい。

谷口のどうでもいい話を受け流しているうちに、学校に着いていた。そして、玄関で上履きに履き替えた。上履きも女子用に変わっている。女子用の上履きを履いた後、谷口と別れ一人で教室に向うそして

教室のドアを開け中に入ると俺の席の後ろの席の主涼宮ハルヒは、すでに登校しており窓から見えるグラウンドを眺めていた。俺は、その横を何も声を掛けず通り自分の席に座る。

「ねえ、キヨン」

ハルヒは、女の姿になった俺に驚かずに声をかけてきた。

「なんだ、ハルヒ」

と後ろを振り向きいつもより少し、トーンを下げて言う。

「どうしたの、あんたいつもより元気ないじゃない？ 珍しい」

そりゃそうだ、突然自分の身体が性転換しているんだから。

「ちよっと、いろいろとあつてな」

「そう。ねえあんた、今日の放課後暇？」

「お前次第で、今日の予定が決まる」

「大丈夫、今日はSOS団の方は休みにしてあるから」

今日、SOS団の活動が休みだという事を初めて知った。

「おい、休みなら昨日のうちに言っておけよ」

「しょうがないでしょう、今日は古泉くんもみくるちゃんも学校に来てないし有希もなんか用事があるってさっき言ってきたし」

「そうなのか」

古泉と朝比奈さんが学校に来てないで珍しいな、しかも長門にも

用事というものがあるのか。

「まあ、休みなら暇だけど」

「そう、なら今日あんたんちに行くから」

「え、今日俺んちに来るのか？」

「そうよ、あんたこの前のテストほぼ壊滅状態だったらいいじゃない。勉強してなかったでしょう」

「それは、その……」

ハルヒが言ったことは、その通りだった。この前の、テストはまったく勉強せず受けてしまった、その結果下から7番目くらいの成績だった。

「我がSOS団の中で、こんな不名誉な成績は有希や古泉くんそしてみくるちゃんも取ってないわ」

「どうやら、SOS団の中で俺の成績は最下位だったらしい。」

「だから私が直々に、あんたにみつちりと教えてあげるわ。もうすぐ、テストもあるし」

「そりゃ、どうも」

「んじゃ、今日の放課後あんたの家に行くからね」

「分かった」

俺がそう言った時、ホームルームが始まるチャイムが鳴り俺は前を向いた。

朝（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

授業

そして、朝のホームルームが終わり、一時限目の数学の授業が始まった。俺は、股の間に違和感を感じながら授業を受けた。

「キョン」

後ろ席のハルヒが俺の肩をチヨンと叩いて呼んだから俺は後ろを向いた。

「ん？ どうした」

「さつきから、足をもぞもぞと動かしているけど何やってるの？」

「何でもない」

「そう、だったらいいけど」

とハルヒが言ったことに対して苦笑いで答え、前を向いた。

「はあ」

俺は溜息をついた。俺はなんとかしてこの股の間にある違和感を消すために太ももをこすり合わせて足をもぞもぞと動かしたが、違和感は消えなかった。それどころか、周りからは変な目で見られているような感じがした。

「その下を向いている奴」

「あ、はい！」

突然、先生に呼ばれたから俺は反射的に返事をした。

「この、問題わかるか？」

と先生は、黒板に書いていた数式を指差して言った。

「・・・・・・分かりません」

「そうか、それじゃあ涼宮、分かるか？」

「はい」

「それじゃ、前に出て答えてください」

と先生が言うと、ハルヒは席を立って黒板のところに行き答えの数式を書いて自分の席に戻ってきた。

「正解です、ここは次のテストに出すからちゃんと覚えておくよう

に」

今の俺には、覚えることができなかった。なんとかして、この違和感を消すために必死に考えていた。頭を抱えてもシャーペンで頬をつついて結局は、なにも思いつかなかった。

「キヨン」

また、後ろから声をかけられたから後ろを振り向く。

「あんた、本当に大丈夫？ さっきの問題もあんたくらいのレベルでも解ける問題だったのに」

「大丈夫だ、ちょっと考えごとをしていただけだ」

と手を横に振りながら言った、この前代未聞のことをハルヒに言いたかったが、周りの人間に聞かれるのが嫌だった。

「だったらいいけど、なんかあつたら私に言いなさいよ」

「ああ、ありがとうな」

と言つて、俺は前を向いた。俺は、周りをきょろきょろと見渡した、気分の問題かは分からないが、周りにいる男子が異性に見えて女子が同性にみえてしまう。あれが生えてから、俺の目に見えている世界が崩壊しているような気がした。そんなことを考えていると一時限目の授業の終わりのチャイムが鳴った。

授業（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

相談

授業が終わると、俺はハルヒに相談がると言って教室から連れ出して人の気配が一切ない廊下にやって来た。

「なに、なんか用？」

「あんな、お前に相談したことがあってな。その……」

俺は悩んだ、今ここでハルヒに自分の股にあるはずのものがなくて言ったらどう反応するか、少し不安だった。

「言いたいことがあったら、さっさと言いなさいよ！」

「……」

俺は、黙り込んだ。

「んじゃ、私から先に聞くわね。あんた、昨日まで男だったでしょう」

「な！？」

意外だった、ハルヒは昨日までの俺を覚えていた。

「あんたに、こんな女装趣味があったなんて以外ね」

「違うんだ、これにいろいろとあってな。決して、俺にはこんな趣味はない！」

とハルヒに、釈明をする。

「じゃ、どう説明するのよ。私が納得する説明じゃないと許さないわよ」

「はあ、やれやれ」

一旦溜息を着ついた後、俺は深呼吸をして聞こえるか聞こえない程度の声で

「き……た……だ」

「はあ！　なんて、聞こえない」

「消えたんだ！」

「消えたって何が？」

「ここに、あるはずのものが！」

そう言つと俺は、迷いながら股のところを指をさした。

「……っな！」

ハルヒは、口をポツカンと開けてただ呆然と立っていた。誰だつてこんなことを突然、聞かされたらこんな状態になるだろうと思つていた。

「……はあ、あんたね、そこまで落ちちゃったのね。そんな、嘘をついてまで自分の真の姿を隠すだなんて」

「嘘なんかついてないぞ。今日の朝、突然消えていたんだから」

「そこまで言うなら、見せてみなさい」
「なにを？」

「その、無くなった部分を」

やっぱり、そう来たか。まあ、相談を持ちかけた側もその相手を信じさせるためにも証拠の提示は必要だけれど、こんなものこいつには見せたくない。

「あれが無くなったんなら、同じ性別の私にだって見せれるでしょう」

「けど、本当にいいのか？」

「いいわよ、ほら見せなさい」

そうハルヒが言つと俺は、スカートの中に手を入れて下着を太もも辺りまで降ろして、少しだけスカートの裾をたくし上げる。

「……」

ハルヒは、俺の男性器の数センチ下のことにある本来、男にはある突起物がないのを見てまた口をポツカンと開けて呆然とそれを見ている。

「本当に、ないわね」

「だから言つただろう、無くなっているって」

「しかし、本当にきれいさっぱり消えているわね。今朝消えてたの？」

「今朝、消えてたんだ」

「なんか他に、変わったところがある？」

そうハルヒが聞くと、俺は何も言わずに首を横に振った。

「そう、しかしこんなことって」

「てか、ハルヒもうそろそろ、戻してもいいだろう」

俺はそう言っていると、スカートを元に戻して太ももの辺りまで降ろしていた下着を再び元の場所に戻した。

相談（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

対策

俺が、馴れない手でスカートを元通りに直しているとハルヒは、まじめな顔をして考え込んでいた。

「うーん、ねえキヨン」

「なんだ、ハルヒ？」

「病院とか行つたの？」

「行ける訳ないだろう。それに、さすがに抵抗くらいはあるしそれになんて説明したらいいか分からないし」

「まあ、たしかに朝起きたら生えていましたって言ってもなかなか信じてはもらえないからね」

そうハルヒが言っていると、俺は何も言わず首を縦に振った。

「しかし、本当にどうしようか……」

と、俺がうつむいて言っているとハルヒが

「ねえ、キヨン」

「なに？」

「私と一発やってみる？」

と、真面目な顔をして言ってきた。

「つな！お前、何言ってるんだ！？」

俺は、廊下中に響く声で言った。突然、そんなことを言われたら誰だつてこんな反応をするはずだ。

「あのね、同人の世界だつたら男同士の行為をするためにあれを消すの、そして行為が終わったら戻ってるっていうのが一部あるの、よくBLもののやつにはよくあるんだよ」

ハルヒは、同人誌で描かれているこういうシチュエーション時の対処法を言つたのであった。

「案外、私たちも一発やってみたら、うまくいくかもしれない」

と、ハルヒはくすくすと笑いながら言った。

「おい、同人の世界と今ここで起きているこの現実を一緒にさせる

な。そんなに、うまくいくわけないだろう」

と、俺は呆れた顔をしてハルヒに言った。

「まあ、冗談はこれくらいにおいて、本当にどうしようか？」

と、ハルヒが言った時、後ろから見知った声が聞こえた。

「あ！ キョン、お前たちここで何やってるんだ？」

俺の悪親友谷口が、突然何の前触れもなく現れたのであった。

「谷口！ どうしてここにいるんだ？」

俺は、動揺した顔をして言った。

「え？ さっき岡部に呼ばれて、職員室に行っていたんだ」

「へえ、そうなんだ」

「そう言うお前たちは、ここで何していたの？ まさか、誰にも言えない女同士の」

谷口が、わたしとこなたの顔を見て聞いてきた。

「ええっと、ちょっと一緒にトイレに行っていたんだよな、ハルヒ」

「うん、キョンが一人でトイレに行くのが怖いって言って、一緒に行ったの」

と、ハルヒは俺の嘘に合わせてくれたのだが、そんなことまで言わなくてもいいのと思った。

「へえ、そうなんだ。そろそろチャイムが鳴るから教室に戻ろうぜ」

谷口、にこにこ笑いながら言った。

「そうだな、そろそろ行こうかハルヒ」

「そうね、そろそろ戻りましょう」

俺たち三人は、話しながら自分たちの教室へと戻ったのであった。結局は、何の解決策が出ないままこなたとの話し合いは終わったのであった。

対策（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

トイレ

二時限目の授業が終わった後、俺はハルヒを教室から連れ出した。ハルヒを連れ出した後、俺とハルヒは誰も入らないような空気を漂わせているトイレへやってきた。この状況を、ハルヒ以外の人に聞かれたくない。

「すまん、ハルヒ」

「別にいいわよ。これくらい。それよりあんた、あれどうなったの？」

ハルヒが、あれについて質問する。

「……まったく変わらずだ」

俺は、正直に質問に答える。

「そっか、消えてないのね」

「ああ……あのうさ、ハルヒ」

「なに、キョン？」

「ちよつと、トイレしたいんで見張っていてくれないか？」

「そう、分かった」

そう言っただけでハルヒは、その場から立ち去り俺は個室に入った。

「どうなっているんだろうな、俺の体？」

俺は疑問に思っていたことがある。疑問に思っていることは、男の子についているあれがない今、果たしてどうなるのかと疑問に思っていた。

「……大丈夫かな……」

と、少し怖気づいていた、でも俺は目前に迫ったこの問題に全力を注がなければ解決しないと思ひ私はスカートのチャックを下げて、下着と一緒に下ろす。

「……」

当然のように、俺のあそこには昨日まであったものが今日の朝突然と消えていた。目を何度もこすってもこれは現実で起こっている

ことなのだ。

「キヨン、まだ」

不意にハルヒの声が聞こえた。

「もうちょっとだけ、待って」

意を決し、俺は洋式の便器にしゃがみ込んで下半身に思いつきり力を込めた瞬間、水が流れる音がした。

「うっわ、出てきた」

予想はしていたが、まさか本当に出てくるとは思わなかった。どうやら老廃物を排出する機能としては女性器の方しか機能していなかった。ものすごく、へんな感じがした。そして、老廃物の排水は終わり俺が便器から立ち上がりスカートに戻した。スカートを戻した後、一旦深呼吸をしてから外に出た。

「終わった？」

ハルヒが、心配そうな顔をして言う。

「ああ、終わった」

と、言った瞬間、チャイムが鳴った。

「やばい、授業に遅れるわ。早く、行きましょう」

と、言いながら、ハルヒは走ってトイレから出ていった。そのあとに続くように俺もトイレから出て教室に戻った。

トイレ（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

体育

三時限目の授業が終わり、俺は体育館の脇にある女子更衣室で体操服に着替えていた。まあ、今の俺の性別じゃ女子更衣室に入ることが必然だが、なんだが複雑な感じがする……体操服は、制服と一緒に男子のものやつかから上はありふれた白の体操服で下は、現在では貴重品となっている紺色のブルマ。もう、この学校以外でブルマ使っている学校なんてないだろう。

「よし、着替え終わりと」

ちなみに、俺はなるべく女子の着替える姿を見ないようにこそこそと着替えた。

「ねえ、キヨン」

「なんだ、ハルヒ？」

と、ハルヒの呼びかけに応える。

「あんた、ここで着替えていいの」

「しょうがないだろう、ここで着替えないと明日から俺は変態扱いされるだろう」

「あんた、よくそんな状態で言えるわね」

「うるせえ」

「けど、あんた前は男だったのに結構いい身体してるわね」

と、言つとハルヒは後ろからギュッと俺に抱きつく。

「ハルヒ……？」

背中には柔らかい二つの膨らみが、ハルヒが身体を動かすたびにその感触が伝わってくる。隔てるものが薄い生地でできた体操服二枚分、あとハルヒがつけているいるであろうブラのみであろう。それが、俺の背中にやや大きめのサイズの胸が当たっている。

「……」

俺は、顔を真っ赤に染めてさらに心臓がドクドクと騒がしく鳴っている。

「ちょ、ハルヒ離れてくれ……」

「あんた、私より胸小さいわね」

俺の身体は、女の身体になりつつがまだ心は男の心だ。つまり

「ハルヒ、ちょっと離れて」

「どうしたの、キョン？」

「とにかく、今すぐに離れてくれ！」

「もうちょっと」

俺の事情を知っているくせにハルヒは、これは軽い遊びのつもりでやっているんだろうが今の俺とてには、この遊びは禁じた遊びなのだ。背中にくっついていたハルヒを強引に引き剥がし両足を揃えて折り、膝を抱えるような格好でその場にしゃがみこんだ。

「どうしたの、お腹でも痛いのか？」

「……」

「キョン、大丈夫？」

ハルヒが俺の前に来た。あろうことが着替えの真っ最中の彼女は上下揃って下着のみという格好でいた。しかも前屈みの状態で、ピンク色のブラからちらりと覗くふつくと膨らんだ胸が形成する谷間が私の目の前に見えた。全身が溶けそうなくらい熱い、頭がふらつき意識が保てない。そして

「……ダラダラ……」

俺の鼻から、真っ赤な液体が大量に流れてきた。そして俺は、気を失い鼻血をダラダラと流してその場に倒れた。

体育（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

目覚め

俺は、更衣室で鼻血を吹いて気絶をした。

「……ここは？」

目が覚めた時、俺は体操着のままベツトの上で寝かされていた。
「意識が戻ったみたいですね」

俺の顔を覗き込んできたのは、見覚えがある養護の先生だった。
養護の先生がいるってということは、ここは保健室だろう。

「先生、お……私どうして保健室に？」

「体育の着替えの時に、鼻血を吹いてそのままバたりと倒れたそうですよ」

先生の話を見ると、どうやら鼻血を床一面に吹いて気絶したらしい。今は鼻血は止まっているが、しばらく安静にしていればいいとのことらしい。

「それにしても、一体どうしたんですか？ 更衣室を血の海に変える量だったそうですが」

と、書類に書きながら、聞いてきた。

「……えっと、どうしてでしょうかねえ……私にもさっぱり」

と、言って私は、仰向けになって天井を見た。

「身体の具合どう？ 頭がくらくらするとか、だるいとかない？」

先生が、俺の体の調子を聞いてきた。

「いえ、もう大丈夫だと思います」

「そうですか、でも念のためにもうしばらくここで横になっていてくださいね」

「分かりました」

「ちよっと、先生職員室に行かないといけないから。すぐに戻るのでちよっとだけ待っていてくださいね？」

そう言い残し、先生は椅子から立ち上がりさっきまで書いていた書類を持って保健室から出ていった。

目覚め（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

保健室「上」

保健室から先生が出ていった後、俺は時計を見た。時計を見ると午後1時を少し過ぎていた。4時限目の授業が終わってお昼休みになっっている時間だった。

「はあ……もう一度寝ようかな」

溜息をついてもう一度寝ようとした時、保健室のドアが開き

「あんた、大丈夫？」

と、聞こえてきた。

「ハルヒ？　なんで、ここにいるんだ？」

ハルヒが保健室に入ってきて、私が寝ているベットの近くにあった椅子を持ってきてベットのところに置いて椅子に座った。

「そんなことよりあんた、大丈夫？　あんなに、床一面を真っ赤に染めて身体大丈夫なの？」

「ああ、なんとかな」

「本当にどうしたの？　やっぱり、女になったばかりだから女の子の身体を見て興奮でもしてたの？」

「……」

返す言葉もなかった。どうやらハルヒは、俺が倒れた理由を見抜いているみたいだ。

「まあ、無理もないわね。突然、女になったんだからね」

そう言っただけでハルヒは、自分が座っていた椅子から立って私がいるベットの端に腰をおろした。ハルヒの安堵に満ちた横顔を見ていると本気で俺の事を心配してくれたのが良く分かった。

「ねえ。あんた、もしもこれが治らなかったらどうするつもりなの？　もしかしたら、またこんなことが起きるかもしれないのよ」

ハルヒの言うとおり、こんな状態で女として生きていけない。それはさっきの一件で身を投じて思い知った。今後の事を考えると不安な要素なんて探せばいくらでも見つかるだろう。

「ねえ、どうするつもりなの？」

「俺にだって、分からないさ……どうしたらいいかなんて
そう俺が言っと、ハルヒは正面から俺に抱きついてきた。」

保健室「上」(後書き)

こんにちは、柊こなた(坂田銀時)です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

保健室「下」

今俺は、ベットの上でハルヒが抱き付いてきて、馬乗りになるような格好だった。ハルヒのしなやかな腕、ほっそりとした太腿が俺の体にぎゅうぎゅうと押しつけられる。そして、ハルヒの膨らんだ胸が俺の身体に当たる。

「……………」

「……………」

お互いの吐息が感じられるくらいに迫った顔、抱き合ったまま二人は固まっていた。

「……………ハルヒ？」

もし俺が普段の男だったらこの状況はものすごく興奮するところだが、今の俺にはとっては別の意味で興奮しそうだ。

「なに、キヨン？」

と、ハルヒは普段とは顔つきが違う大人っぽい顔をして言う。

「あのさ、これってどういう事なんだ？」

「嫌なの、キヨン」

ハルヒはいつものニヤついた笑みはなくそこにはあるのは表情の消え失せた顔だった。なにを考えていか全く分からない、見たことのない怖いくらいの無表情だった。

「い、嫌じゃないんだが。ただ……………」

「ただ？」

「その……………あの……………」

嫌じゃないけど、どう言ったらいいか分からない。

「キヨン」

そう言つとハルヒは、ギュツと俺に身体を抱きしめた。

「ハルヒ？」

「……………」

俺の問いかけには何も答えず。ただ俺の身体を抱きしめていた。

「キヨンが、倒れたって聞いた時本当に心配したんだよ。もし、キヨンの身に何かあったら私、どうしたらいいか」

ハルヒは、目から涙をこぼしそうな顔をして言う。

「ハルヒ……」

それからずっと俺とハルヒは抱き合い、しばらく経ってからハルヒがゆっくりと俺の身体を離してベットから降りた。

「じゃそろそろ行くわね。次の授業が、移動教室だから」

そう言い残すと、ハルヒは振り向くことなく保健室から出ていった。

俺はたった今初めて、ハルヒのいつもとは違う「女の顔」を見た。いつものハルヒだったら絶対に見えない、女の子らしい表情だった、もしこれが生えなければ一生見ることができないハルヒの素顔だった。

保健室「下」(後書き)

こんにちは、柊こなた(坂田銀時)です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

帰宅

あれから時が流れ放課後、俺は放課後になるまで仮病を使って保健室に居座っていた。授業を受ける気がなかったからである。そして今日のSOS団の活動は休みで今週はテスト週間のため部活も休止になっていた。だから俺は、家に帰って勉強しながら今後のことをどうするか考えながらやろうと思っていたながら靴箱から靴を取り出したとき後ろから

「ちよつと、待ちなさい!!」

と、ハルヒが怒った表情を見せて言う。

「どうしたんだ、ハルヒ? そんな大声を出して」

「『どうしたんだ』じゃないわよ。あんた、私が朝教室で言ったことを忘れてるでしょう!」

そうハルヒが言った瞬間、ハルヒが朝教室で言っていたことを思い出した。俺があまりにもテストの成績が悪いためハルヒの家に泊まり込みで勉強会をすることになっていた。

「……悪い、すっかり忘れていた」

朝からいろいろとあったから無理もないと自分に言い聞かせる。

「まったく。そうそう、勉強会だけどあんたの家じゃなくて私の家でやるから。早く、家に帰って支度して来なさい」

「また、突然だな」

「いいじゃない。別に場所が変わっても目的は変わらないし、それに」

「それに?」

「例のあれもまだ解決していないしね」

と、俺の身体を見ながら言う。

まあ、こんなときに自分の部屋の閉じこもっていてもただ悪い方向へと考えてしまうだけだ。恋愛感情を抜きにしても、唯一の相談相手であるハルヒの存在は大きい。

「……分かった」

「それじゃ、さっさと家に帰って支度して私の家に来なさい。分かった？」

「ああ」

「それじゃ私、先に家に帰って待っているから」

そう言つとハルヒは、靴を履いて玄関から出て行つた。そのあとに続くように俺も玄関から出て家に帰り、泊まり込みの準備をしてハルヒの家に向かつた。

帰宅（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

勉強

今俺とハルヒは、ハルヒの家で次のテストに向けて勉強していたのであった。明日は、学校が休みのためたまには泊まり込んで勉強しようと思案したのは今日の話だった。

「あ、消しゴムが……」

机の上に置いてあった消しゴムが、机の上から転がり落ちた。

「あれ？ どこにいった？」

落ちたはずの消しゴムがどこに行っただけであった。

「どうしたのキヨン、消しゴム見つからないの？」

ハルヒが心配そうに聞いてきた。

「ああ、どこにいったの」

と、俺が机の下をのぞいた時ハルヒが

「ねえ、キヨン」

「何だ、ハルヒ」

「あんた、元は男のくせによく履けるわね。『白色』のパンツを」

「……！？ ちょ、お前どこ見てるんだ！」

と、俺は慌てて立ち上がった。言った。

「しょうがないでしょう。見えたんだから」

と、ハルヒはいやらしい顔をして言ったので、俺は急いでスカートを押さえた。やっぱり、制服のままで来たのは失敗だった。着替えてから来ればよかったと後悔する。

「はあ」

俺は溜息をついた。

「どうしたの？」

「別に何でもない。それより勉強やろう」

と、落ちていた消しゴムを拾って机に向ったのであった。

「なあ、ハルヒ」

「なに？」

「今日、お前の親御さんはいないのか？」

「そうよ。今日私以外の人みんな出かけているのよ」

「……つまり、今日は俺とハルヒだけっていうことだよな」

「そうよ。何か悪い」

と、ハルヒは机の上に置いてあったお菓子を食べながら言う。

「いや。なあハルヒ、そろそろ夕飯の準備しようぜ。もうこんな時間だし」

時計は7のところを指していた。

「そうね。私もお腹減ったし。行きましょう」

そうハルヒが言うと俺とハルヒは、一階に降りて行った。

勉強（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、未定です。

入浴

今日の晩御飯は、ハルヒと協力して数少ない俺の得意料理のカレーをつくった。

「キョン、これめっちゃ結構おいしいじゃない」

「まあ、カレーは数少ない得意料理だから……」

俺は食べながら思った。ハルヒは俺の事をどう思っているんだろう。今は性別が同性なだけに特になんともただの友人としか思っていない可能性が高い。でも、保健室でのあのハルヒが見せた「女の子」とした表情はなんだったんだろうか。異性として、俺の体に男の子のものがつていることに恥ずかしがったか。でも、そんな気はしなかった。でも、その確証もない。

「もうこんな時間か……ハルヒ、俺先にシャワー浴びてくるわ」

「うん、分かった」

と、ハルヒはカレーを食べながら言った。俺はその場から逃げるようにバスルームに向った。

「今日のところはシャワーで済ませておこう」

というのが、女の俺と男の俺の俺の意見だった。スカートを降ろして洗濯機の端っこに引っかけた。そして、下着も足から抜き取る。下半身が裸になった私は、洗面所の鏡に自分の姿を映した。

「……」

相変わらず、俺の股のところにはいつももあるはずのものがなかった。俺は、いつも通りにシャワーを浴びているときふと妙な違和感に囚われた。肩をぐるぐると回したり、腕を太もも、手のひらでしばしと叩いてみると、以前の身体には弾力はなかったのが今の身体には弾力がありプニプニしている。

「あれ？　なんか……プニプニしているな？」

気のせいだ。身体の硬さなんて普段から気にも留めていない。そ

して

「……あれ？　こんなに胸大きいかったっけ？」

薄々体育の時から感じていたのだが、身体の変化は筋肉の弾力がなくなっただけではなく、胸の方も少し大きくなっているような気がした。

「一体、俺の身体どうなるんだろう……」

どんどん男の子から離れ行く俺の身体。そして心の中までもが

入浴（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

二人「上」

俺とハルヒは、ぎくしゃくした時間を過ごし間もなく日付けが変わろうとする頃

「そろそろ、電気消すわよ？ キヨン」

「ああ、分かった」

そう俺が言った後、ハルヒは電気を消した。

「なんか疲れたな……朝から、色々とあり過ぎて」

「そうね、結局キヨンのあれも解決しなかったし」

「……なあ、ハルヒ」

「なに？」

「なんで一緒に寝るベツトで寝ているんだ？」

「しょうがないでしょう、部屋が狭いから。別にいいじゃない。」

「やれやれ」

俺は、小声でつぶやいた。

「……全然眠れない」

ハルヒと一緒に寝るなんて夢にも思っていなかったら今、極度の緊張に侵されていた。そして結局、その緊張に耐え切れず俺は、かばりと布団を跳ね除けて上体を起こした。

「どうしたのキヨン？ 寝れないの？」

ハルヒも布団をのけて身体を起こす。

「ああ」

寝れない原因は、今俺の横にいる人のせいで寝れなかった。いろんな意味で

「……なあ、ハルヒ」

「なに、キヨン？」

ハルヒが首を少し傾けて聞く。

「俺、このまま女になるかもしれない」

「何言っているの、キヨン？」

暗い中、ハルヒが一体こいつはなにを言っているんだという目をしてこちらと見つめている。そして、俺はシャワーを浴びている時のことをハルヒに話した。

「あのな、さつきシャワーを浴びていた時自分の体を触ってみたんだけど、以前の俺とは違う体つきになったような気がするんだ」

「……体つきが？　どんな風に違うの？」

「どう言ったら分からないが、なんか女の子っぽくなった感じがかな？」

そう言っていると俺は、風呂場で感じたことをそのままハルヒに説明した。筋肉のことや胸の事もすべてを話した。そして、説明していくにつれてと俺は思った。もしかしたら、あれが消えたのは変化の前ぶれだったかも知れない。下半身や頭の中を中心に、これから身体全体が女に近づいていくのではないのかと思った。

「と、言う訳なんだ。ハルヒ」

俺がすべてのことを話し終えると、ハルヒは俺の前に来てベツトの上で座り込むような格好で二人揃って座っていた。

「……さ、触ってもいい？」

そう言っているとハルヒは、俺の返事を待たずに右手を伸ばして来た。

そして、俺の肩から腕までをゆっくりと擦っていく。

「どうだ、ハルヒ？」

「……うん、なんか前は硬かったのになんか柔らかくなっている」

今度は、太腿が触られる。外側と内側の両方、ゆっくりとなでられて平手でやんわりとやさしく叩かれる。

「いまいち分からないけど、もし本当に変わっていたらえらいになるわ」

「本当、えらいことになる……ハルヒ、あとここもちょっと大きくなっているような気がするんだが」

そう言っていると、俺は自分の胸を指でさした。

「そ、そうなんだ」

ハルヒがそう言っていると、恐る恐るといった様子で両手を伸ばしてさ

つき俺が指摘した場所にそつと触れた。小さな、手のひらがパジャマ越しに膨らみを揉み解していく。

「……」

「……」

ハルヒが胸を触っている間、俺は顔を真っ赤に染めていた。なんだろう、この気持ちはただの検査なのに身体を中を撫でまわされている間、変なところばかりに目が行ってしまふ。外からカーテン越しに月の光が、暗闇の中で白く浮かび上がらせる。剥き出しになった肩、白い太腿そして僅かに分かるささやかな膨らみ、そんな光景が少しずつ俺の理性を奪っていく。

そんな状況に気取られていた時、突然ハルヒが俺を強引に引き寄せ俺の唇に自分の唇を……重ねた。

二人「上」(後書き)

こんにちは、柊こなた(坂田銀時)です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。なお、次回の話は、一部過激のシーンがあります。

二人「下」(前書き)

こんにちは、柊こなた(坂田銀時)です。今回の「ハル キョン」の第15話「二人「下」」ですが一部、過激な描写がございます苦手な方はご注意ください。

二人「下」

俺はハルヒの唇に自分の唇を重ね、そのまま舌を押し込んだ。突然のことだったからか、ハルヒは抵抗らしい抵抗も見せなかった。数秒間、その状態が続き、そして俺はゆっくりと唇を離し

「……キヨン？」

「……ご、ごめんなハルヒ。突然、こんなことしちゃって……俺、その」

そうハルヒに言うとは、怒った表情も見せず何も言わずに俺の身体を抱く。

「は、ハルヒ？」

「キヨン、実はね。私、あなたに言っておきたいことがあるの」と、ハルヒが真っ直ぐな眼差しで俺を見つめる。

「あのね。実は……」

ハルヒは顔を赤く染めて足をモゾモゾと動かす。

「ハルヒ、隠し事があるのなら隠さなくてもいいんだぞ。もう、俺の隠し事も話しているし」

「うん……分かった」

「ほら、言ってみな」

「あのね、私……」

そう言うハルヒは、ベットから立ち上がり俺の目の前で何も躊躇せずズボンを下ろした。

「ちょ！ お前、何やってるんだ！」

俺はハルヒの突然とした行動に驚きながら自分の目を閉じる。

「キヨン。ちゃんと見てほしいの」

「見てもいいのか」

「うん」

そうハルヒが言うから俺は、少しながらの抵抗を感じながらゆっくりと目を開けハルヒを見る。そしてそこには、驚きの光景があっ

た。

「ハルヒ……お前……」

ハルヒの股のところには本来なら女の子には絶対に存在しないものが、最初からあったような存在感を出しながらちょこんとついていた。

「見ての通り、私もキヨンみたいに股のところに異常が起きたのよ」
まさか、こんな現象がハルヒにまで起きていたとは夢にも思っていなかった。

「いつから、あつたんだ？」

「今朝、目が覚めたらあつたのよ」

「どうして、それを今まで黙っていたんだ？」

そう俺が聞くとハルヒは、俺の目から背けるように顔を下に向けて嫌われるのが嫌だったの」

「嫌われるのが？」

「だって、こんなこと話されたら誰だって嫌うでしょう。それが嫌だったの」

その気持ちは俺にもよく分かる、俺もハルヒにこのことを話した時ともそんな気持ちがあったからものすごく怖かった。

「ハルヒ。お前、今までずっとそれを一人で抱えていたんだな」

俺がそう言つと、ハルヒは何も言わずに少しだけ首を縦に振る。

「大丈夫だ。お前は一人じゃない、俺がいる。女の俺だけど俺はお前の味方だ」

「キヨン……」

そう言つと、どちらからでもなく自然に俺たちは月の光が差し込む中、抱き合った。そして数分間俺たちは抱き合いゆっくりと離れた。そして……

「キヨン、本当にいいの？」

「ああ、今のお前にとってこの状況は我慢できないことなんだよな」
「うん。じゃあ、行くよ」

ベツトの上で激しい行為に耐え、必死にハルヒの体にしがみついていた。

「はぁ……はぁ……どうかなキョン……気持ちいい？」

ハルヒは、俺の身体の上で馬乗りになる格好で息を切らしながら「気持ちいいよ……ハルヒ……もっと、もっとやっていいよ……」

ハルヒの女の子した柔らかな身体に触れるのがたまらなく興奮する。決してたどり着けない、女の子しか味わえない性の快感。今だからこそ、許されない行為を実現でき大好きな女の子と一つになれる。初めてハルヒのパートナーとして認められたような気がした。今だけは、例のあれも気にならなかったもう恐怖心はなかった。俺たち二人は、時間が許す限りお互いの愛を確かめ合った。

二人「下」(後書き)

こんにちは、柊こなた(坂田銀時)です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

告白

俺は、まだ眠たい重いまぶたを開け目を覚ました。目を覚ますと俺は、昨日の夜の記憶をたどった。昨日の夜は、空が明るくなるまでベットの上でハルヒとあんなことやこんなことをしていたというところまでははっきりと覚えてる。まあ、あれほどの痛みを忘れられるわけない。だけど、そこから先はよく覚えていない。そんなことを考えつつ俺は普段とは違う、奇妙な違和感を感じ周りを見渡す。そして、窓の外を見てみると夕方の光に近い日差しが窓からさしていた。どうやら、夕方らしい。窓を見た後、俺は隣でまだ寝いていたハルヒを見た。

「……」

ハルヒは、俺の腕に包まれるように眠っていた。そして、俺の下半身の辺りが湿った感覚がした。

「うわ、シーツべたべたじゃん」

頑張り過ぎたせいかは分からないが、シーツには多種多様な液体が豪快に撒き散らしていたらしい。けれど、違和感はそれだけではなかった。

「あれ？」

昨日まで俺の股のところになかったものが急に出来たのであった。触らなくても感触が伝わってくる。

「ん……」

ハルヒが目目を擦りながら目を覚ます。

「おはよう、ハルヒ」

俺がそう言うのとハルヒは、目をつつすらと開き俺の顔を見て

「……おはよう」

と、言った。至近距離で見つめ合う俺たち、そしてお互い昨日のことを思い出したのか揃って顔を赤く染める。なぜなら、お互い睡眠をとるにはふさわしくない格好でいた。

「あれ？」

ハルヒが拍子抜けした声を出して言う。

「どうした、ハルヒ？」

「あれがなくなっている」

そう言つてハルヒは、自分の股のところを指さして言う。

「本当か！ ハルヒ」

「うん。てか、キョン。あんたも元に戻っているの？」

俺の身体を見ながら言う。

「目が覚めたら元に戻っていた」

「そう。よかったわね、キョン」

そう言つとハルヒは、ベットから降りて近くにあつたシャツを着て「ちよつと、喉渴いたから飲み物取つて来るわね。あんたもいる？」

「うん」

俺がそう返事をしたするとハルヒは、飲み物を取りに一階に降りて行つた。

「結局、あれは何だつたんだろうな」

「分からないわよ、私にも」

ハルヒが持つてきた飲み物を飲みながら俺たちは、今回起きた怪奇現象のことを話していた。

「なあ、ハルヒ」

「どうしたの？」

「お前、どうして……その」

「なに？ 言いたいことがあるなら言いなさい」

「じゃ、改めて聞くけど。ハルヒ、どうして俺とやる気になったんだ？ あんなにおかしくなっていた俺に、簡単に身体を差し出したりするなんて……」

そう聞くとハルヒは、俺の顔を見つめて言った。

「そんなの決まっているじゃない。私は、キョンのことが……好きだから」

「え？」

突然のハルヒからの告白で俺は頭が追いついていかなかった。

「キヨンのことが好きだから。好きじゃなかったら、あんなことまでやらないわよ」

「そうか。ありがとうな、ハルヒ」

そう言つとハルヒが、ものすごい至近距離まで顔を近づけて

「ねえ、キヨンは私のことどう思っているの？」

と、聞いてきた。

「俺も好きだ。ハルヒ」

俺は、今こそ自分の想いハルヒ言わないといけないと思った。ここで言わなかったら、もう二度とハルヒに自分の想いを伝えられない。

「俺もハルヒのことが好きだ。一人の友人じゃなくて一人の女の子としお前のことが好きだ」

そう自分の想いを伝えるとハルヒは、涙を思いっきり流し俺に抱きついた。

「ありがとう。私、とても嬉しい」

と、言つとお互い再び何も言わずベットのの中に潜り込み、素肌で抱き合つた。ずっとこの気持ちを忘れないように

告白（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回で、最終回となります。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

ハル キヨン（前書き）

このたびは更新が遅れてしまつて大変申し訳ありませんでした。

ハル キョン

あれから数日後、俺はハルヒを学校の屋上に呼び出していた。ハルヒの目の前には、男の身体を取り戻した俺がいる。そして、俺の目の前にはこの数日間俺の身に起きた奇想天外なシナリオと同じことが自分の身体でも起きていたハルヒがいる。最初は、ハルヒに相談したことを後悔していたが結果的に悪くないエンディングを迎えることが出来た。

「キョン、本当に私なんかでいいの？」

と、ハルヒが恥ずかしながら俺に聞く。

「ああ、なんか嫌なことでもあるのか？」

「別に、そんなんじゃないわよ」

ハルヒはそう言っていると、顔を下に向けて

「けど、こんな我が儘な私と一緒にしてくれてもいいのかなって思ったから」

ハルヒが、珍しく顔を赤くして言う。

「別にいいじゃないか。お前が、我が儘女でも俺はそういうところを含めて惚れたんだからさ」

こう改めて言っていると結構恥ずかしいな。

「そっか……そうだよ。てか、なんか変な感じしない？」

「変な感じ？」

「ほら、私たちって普段からこんな真面目な話とかしないじゃん」

まあ、たしかにハルヒの言うとおり普段はこんな真面目な話をしないから……。けど、たまにはこういうのもいいかもしれない。

ハルヒの意外な一面も見ることができたし、ハルヒのことをさらに知れた。そう思った俺は、ちょっとだけ調子に乗ってみることにした。

「ハルヒ。ちょっと顔を上げてくれないか？」

俺がそう言っていると、ハルヒはゆっくりと顔を上げ俺の顔を見た。そ

して……俺は自分の唇をハルヒの唇に重ねた。

ハル キヨン（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。今回の17話をもちまして最終回とさせていただきます。今まで、ご覧いただき本当にありがとうございます。

想い

あいつと出会うまではつまらない毎日が続いていた。けど、あいつと出会ってからはずまらない日々が楽しくなった。初めて会ったのは入学式で、私の前の席にいて顔から見て面白くない奴だなと思ったのが第一印象だった。けど、あいつと話して行くうちにあいつといるのが楽しくなっていて、何時しかあいつのことが好きになっていた。いつも私の頭の中ではあいつの顔が浮かんでいた、授業を受けているときやお風呂に入っているとき、ご飯を食べているときなど何をしていてもいつもあいつを思ってしまう。

そしていつしか、あいつに自分の思いを伝えたいという思いが芽生えた。だけど、あいつが私のことをどう思っているか分からない。あいつの前にはいると自分の気持ちを隠そうとして、つい、あいつのこと傷つけることを言ってしまう。もうこんな自分は嫌だ。もっと自分に正直になって自分の気持ちを伝えたい。だけど、まさかあんな奇想天外な展開で自分の気持ちを伝えることになるとは……

それは、何の前触れもなく現れた。

「なんじゃこりゃあーーーーー!!」

私は、眠りから目が覚めて数秒で奇声を上げた。

「どうしたのハルヒ、そんな大声出して」

お母さんが、私の部屋のドアの前に来て私に聞いてきた。

「い、いや何でもないよ、お母さん」

「本当に？ ちょっと入るわよ」

と、言うとお母さんはドアノブに手をかけドアを開けようとした。「本当になにもないから。お母さん、さっきお父さんが呼んでいたよ」

私は、とっさに嘘をついた。

「本当？ 一体何かしら」

と、言ってお母さんはドアの所から離れて一階に降りていった。

「……危なかった」

なんとか、お母さんを追い払った。まさか、こんなことになっている自分の姿を見せてはいけなかった。

私は、自分の目を疑った。今、自分の股のところが膨らんでいたのであった。

「ま、まさかね。そうよ、これは夢よ。もう一回寝たら覚めるわきつと」

自分に言い聞かせながら私は、もう一回ベットに横になり寝た。だが、再び起きても股のところは膨らんでいた。

「う、うそでしょう……あっ！ きつとなにかが入っていて膨らんでいるのよ」

そう思いながら私は、パジャマと下着を一緒にごそつと降ろしてみた。

「……そ、そんな、そんなことが」

私は泡を吹いて気絶しそうだった。股のところには本来なら女の子には絶対に存在しないものが、最初からあったような存在感を出しながらちょこんとついていた。

「どうして、そんなものが……」

もう私は言葉を失った。今、自分の身に起きていることに。突然、眠りから目覚めたら自分の股のところに本来なら女の子には絶対につかないものがそこに着いているのだ。未だに状況が飲み込めずに、口を大きくポカンと開けて立っている

「ハルヒ、そろそろご飯食べないと学校に遅刻するわよ」

お母さんが言ってきた。その声のおかげで、私は正氣に戻った。

「うん、分かった。すぐ行く」

降ろした下着を再び履き、パジャマを脱ぎ制服に着替えてカバンを持って一階に降りていき、朝食を食べて学校に行ったのであった

想い（後書き）

こんにちは、柊こなたです。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576p/>

ハル キョン

2012年1月13日22時51分発行